

SRM学会 2024年度関西西部会開催

上田理事長「ウェルビーイングの醸成法」講演

ソーシャル・リスクマネジメント学会(SRM学会)、理事長・上田和勇専修大学名誉教授は8月3日、今年度の関西西部会を大阪市中央公会堂大会議室で開催した。当日は副理事長の亀井弘明事務局長(日新火災)の総会司会により、関西西部会担当常務理事の山田秀樹氏(大阪家庭裁判所参与員)の歓迎の言葉に続き、上田理事長が閉会を宣言。その後、亀井事務局長の司会により、2氏による研究報告と上田理事長の講演が行われた。

を応用した研究事例として、自身の研究論文(オーストラリアにおける意図された偶発性のメカニズムの究明がテーマ)に基づき、アフタクションの

浅津氏、饗庭氏が研究報告

最初に浅津光孝氏(常務理事、浅津中小企業診断士・社労士事務所)が「リスクマネジメントにおける論議の落とし穴に関する一考察」と題して報告。戦時下における戦

象からでも新たな発見や革新の仮説を生むことができ、高い創造性をもった発見や革新をもたらすアフタクションのAIにはない優位性、有用性を主張した。また、アフタクションによる副次的なメリットとして、仮説の生成過程での試行錯誤および、それに伴う多方面の研究者との交流における知の探索がもたらす創

発性を挙げた。結びとして、経営学において、王道としての実証に基づく研究と並んで、アフタクションによる革新的な仮説を導く推論の果たす研究の可能性について言及した。続いて、饗庭正氏(元損保ジャパン)が「令和6年能登半島地震にみるソーシャル・リスクの検証」をテーマとして研究報告を行った。冒頭、同研究の問題の起点として「今回の地震において、救助・救援や復旧・復興に著しい遅れが生じている。その原因の所在やソ



上田氏



亀井氏



山田氏



浅津氏



饗庭氏

「心身共に良好で社会的に良好な関係を持つ職場、例えば、職場だつたら上司、後輩、こういった人たちとの関係や地域との関係が良い関係にある状態」としている。また、上田氏は以前から研究していたレジリエンスについて、「危機に陥った個人や組織が危機からはい上がっていった要因について、個人と組織でどう違うのか。今日のテーマのウェルビーイングの場合はどうか。個人と組織で違うのかどうか」という問題を投げ掛け、結論として、答えは極めて常識的であり、逆境からはい上がるには「独りではできない、何か(誰か)との『つながり』が必要だ」と強調し、多くの事例研究を通じて実証した。自身の苦い経験も理論構成に取り入れ、仕事の場における「褒めること」の重要性を強調し、講演を終了した。最後に戸出会長が閉会の辞を述べ、関西西部会を終了した。